

広島大学ヨーロッパ中世研究会と原野昇先生

水田英実
山代宏道
中尾佳行
地村彰之
四反田想

1999年の暮れにミレニアムを意識して、「2000年から見るヨーロッパ中世－異文化接触の視点から－」という一般向け公開講座を企画し、その準備のために研究発表を重ねて、問題関心の相互理解を促すことにしたのが研究会の発端であった。それから、月一回のペースでほぼ毎月、輪番で研究発表を行ってきた。毎年新しいテーマを選び、一年の成果を一冊にとりまとめて刊行するというサイクルを繰り返してきた。テーマは同じであっても、各自のとらえ方はまるで違うから、時に白熱し、時にすれ違い、時に啓発される。

広島大学ヨーロッパ中世研究会では今年3月に、二日間の日程で "Exclusion and Tolerance in Medieval Europe" と題する国際研究集会を開催し、海外の研究者を交えて討議する機会をえることができた。従来に増していっそう広い視野のもとで、中世ヨーロッパ研究を深める幸運をえたことに感謝するほかない。しかし息をつくまもなく、次号に向けてのサイクルは既に始まっている。

以下では、これまでの『中世ヨーロッパ』シリーズ5冊の論集の「タイトル」「まえがき」「目次」「あとがき」、ついで2005年の国際研究集会の報告概要を掲載することで、過去5年間の研究会活動の一端を紹介する。

『中世ヨーロッパに見る異文化接触』(2000年9月、溪水社刊)

まえがき

人類の歴史は争いの歴史であると言えよう。争いはどこから生じるのか。それは「自」と「他」との対立から始まる。また「同」と「異」との区別から生じる。味方と敵である。人類は古来より、血縁、人種、言語、宗教、その他さまざまな物指しを「同／異」の判定基準としてきた。「同／異」には一つの視点があり、同時に、それに相対立する反対の視点が存在する。すなわち、ある一つの視点からの「同」の拡張は、反対側の視点から見れば、自分たちの「同」の縮小にほかならない。ここに争いが生じる。人類の歴史が争いの歴史であるゆえんである。

中世ヨーロッパにおける「異」なるもの、「同」なるものとは、いかなるものであったのか。どのようにして「同」が形成され、「異」と接触・対立し、あるいは融合・共存していったのか。本書では原野が、イスラム世界に対するキリスト教世界擁護の視点が濃厚な文学作品『ロランの歌』を手がかりに、作品の受容者の間に醸成されたであろう異教の世界像を探る。水田は、十字軍という、キリスト教世界とイスラム世界との衝突をとおして、キリスト教世界の側から見ての、神学および精神生活にもたらされたとされる影響を再検討する。山代は、ノルマン征服を事例として取り上げ、「異」「同」がいかに接触、対立、共存、統合していったのか、それらをとおして、新たなイングランド的アイデンティティが、いかに形成されていったのかを概観する。地村は、チョーサーの言語を、主に語彙における異質性の面からアプローチし、その社会的価値や文学的效果を明らかにする。四反田は、古代以来受け継がれてきた異類像、世界像の中世における変容を、知識とイメージの両方の観点から見ていく。

5編を全体として通読していただき、中世ヨーロッパにおける「異」なるもの、「同」なるものとのとらえ方やアプローチの多様性を知り、21世紀に向けて、異文化接触の問題を考える上での手がかりを得ていただければ望外の幸せである。

目次

『ロランの歌』に見る異文化	原野 昇
十字軍のもたらしたもの	水田 英実
ノルマン征服と異文化接触	山代 宏道
チョーサーの英語に見る異文化	地村 彰之
ドイツ中世に見られる世界のイメージ	
- 『博物学者』と『世界年代記』を中心に -	四反田 想

あとがき

本書は中世ヨーロッパの思想・歴史・文学に興味・関心をもつ5名が執筆したものである。5名は中世ヨーロッパ研究会の名のもとに、毎月1回の勉強会を行っている。この会の発足は比較的新しいが、各メンバーは「西洋古代中世哲学研究会」「広島ヨーロッパ中世史研究会」「広島英語研究会」「広島大学中世フランス文学研究会」などで長く活動してきている。本会は、従来の特定分野を越えて、中世ヨーロッパを幅広く総合的にとらえる目的で、1999年に始まったものであり、本書はその最初の成果である。2001年8月には、中世ヨーロッパ研究セミナー（広島）の開催が予定されている。

本書の刊行に際しては、財団法人広島大学後援会の平成12年度サタケ教育研究助成金の給付を受けることができた。記して謝意を表する次第である。また、溪水社の木村逸司社長には、このたびもまた大変お世話になった。

『中世ヨーロッパ文化における多元性』(2002年8月、溪水社刊)

まえがき

われわれは先に、中世ヨーロッパにおける異文化接触について考察した。その際、考察に先立ち、「同」と「異」の概念が前提されること、その「同／異」の概念が形成されるには特定の視点が前提されることを確認した。例えば、個人が自分の属する集団、共同体を「同」と認定し、それ以外を「異」と判断する。別の言い方をすれば、自己を「中心」と考え、他を「周縁」ととらえる視点がある。

言うまでもなく、「異」あるいは「周縁」とみなされた側からみれば、この関係は逆転する。これを第三者の視点からみれば多文化、あるいは複数文化 (multi-cultures) ということになる。

このたび取り上げようとするのは、そのことではない。集団 (共同体) の構成員によって「同」と認識されている集団内において、その「同」ははたして均一な、唯一の「同」なのかを問おうというのである。

前著では、中世ヨーロッパにおいて、異なる多様な文化がいかに接触、対立、衝突、共存、融合していったかをみた。その際、異なる多様な文化が融合し、新たな中世ヨーロッパ文化が創成された事例もあるであろうが、そのような例はむしろ稀であり、異なる多様な文化が、多かれ少なかれその固有性を保持しつつ共存あるいは混在している例の方が多いのではなからうか。そこで今回は、中世ヨーロッパ文化を多元性の視点から検討してみることにした。

しかし多元性というと、単なる多様性や「多源性」ではなく、根本システムの複数性をいうのであり、ある時代や地域を限定した社会について、それほど簡単に言えることではない。

とはいえ、文化に関しては、一元的ということもかえって言い難い。新しい知の開拓や芸術分野など、人間の創造活動にあっては、既存の体制や価値システムに疑問を呈したり、批判的にみる視点こそ、活発な活動の源泉である。したがってある社会の文化が一元的にみえるとしたら、それは表面的でしかありえず、内実を注意深く観察すれば、そこには多様な要素が競い合っているはずである。それをここでは多元性ととらえていきたいと思う。

ある時代や地域を限定した社会について、と言う場合、「中世ヨーロッパ」という限定は時間的・空間的に幅が広い。本書では、時代的には11世紀から14世紀くらいまで、また地域的にもイギリス、フランス、ドイツを中心とした西ヨーロッパ地域に限定している。したがって、キリスト教文化の優勢な時代・地域としての「中世ヨーロッパ」がイメージされている。

山代は、フランスのノルマンディー地方バイユーにある、ノルマン人のイングランド征服を描いたタペストリーを取り上げ、その制作者、制作意図、制作責任者と従事者、場面描写の分析や聖俗の性格規定をとおして文化的多元性を探っている。原野は中世フランス文学の一作品『オーカッサンとニコレット』

を取り上げ、そこに描かれているさかさまの世界など、確立された既存の価値体系をひっくり返すような表象世界の一端を紹介する。地村は外界認識のありようを示す言語を手がかりに文化の多元性に迫るために、チョーサーの英語における外来語の使用や語形成を分析する。四反田は、古アイスランド語「エツダ」等におけるゲルマン的要素とキリスト教的要素の比較分析をとおして、中世ゲルマン・ドイツ語圏文学の世界における多元性をみる。最後に水田が「中世ヨーロッパの多元的理解は可能か」と題して宗教的多元論の成立の可能性を論じる。

目次

バイユー＝タペストリーにみる文化的多元性	山代 宏道
フランス中世文学にみる多元性－『オーカッサンとニコレット』再読－	原野 昇
チョーサーの英語における多元性	地村 彰之
古代北歐文学と中世ドイツ文学における	
ゲルマン的要素とキリスト教的要素の関係性	四反田 想
中世ヨーロッパの多元的理解は可能か－宗教的多元論の成立可能性－	水田 英実

あとがき

前著『中世ヨーロッパに見る異文化接触』刊行後、多くの方々から貴重なご意見をお寄せいただいている。2001年10月には、広島大学において、本書の書名と同じ「中世ヨーロッパ文化における多元性」と題するシンポジウムを開催し、著者たち5名が発題した。その場でもいくつかのご指摘をいただいたが、本書はそれらをふまえてまとめたものである。いわば前著の姉妹編である。

2001年9月11日に、アメリカで同時多発テロ事件が発生した。その衝撃はあまりに大きく、われわれのこれまでの考察を吹き飛ばし、その歩みを怯（ひる）ませかねないものであった。われわれが異文化衝突を含めた異文化接触、多文化共存の問題に関心を抱いているのは、中世ヨーロッパを対象としながらも、あくまでも今日の問題考察へのヒントを求めていることであつたからである。しかし、それだからこそ、議論を机上の空論に終らせないためにも、よりいっそ

う深い分析を目指して、前進しなければならないであろう。

『中世ヨーロッパと多文化共生』(2003年9月、溪水社刊)

まえがき

対象を「中世ヨーロッパ」という地域と時代に限定し、2000年に刊行した第一作『中世ヨーロッパに見る異文化接触』では、同と異の視点から、異なる多様な文化の接触、対立、衝突、共存、融合の問題を扱い、2002年に刊行した第二作『中世ヨーロッパ文化における多元性』においては、根本的文化システムの複数性を検討した。

本書では、前著の続きとして、多様な価値システムの共存を多文化共生ととらえ、中世ヨーロッパ文化を見直したものである。

三著をとおして、現代社会が向かいつつあるかに見える文化のグローバル化、一元化、画一化の傾向に対する疑問、およびそのヒントを得る手がかりを中世ヨーロッパ文化のなかに見出すことができないかという思いが、著者たちの問題意識として一貫して流れている。

本書では、山代が「中世イングランドにおける多文化共生」をアングロ＝ノルマン期を中心に論じ、大野が、チョーサーにおける「心」に関連する語彙を取りあげ、英語におけるアングロ・サクソン系とフランス語系を中心とする語彙の共存を、多文化共生の視点から論じる。地村は、チョーサーにみられる格言的表現を通して複眼的思考の跡をたどり、価値判断における多文化共生について考察する。四反田は、中世前期のキリスト教布教活動従事者の宗教的語彙をとりあげ、それらの語彙がになう概念におけるゲルマン文化とキリスト教文化の共存、競合のありさまを分析する。原野は、フランス中世文学において騎士がいかに多様に描かれているかを出発点として、さまざまな文学ジャンルの出現をとおして、多様な価値観の共存の様をみる。水田は、ジュリアンとトマス・アキナスの思想を分析し、宗教理解の寛容性の視点から、多文化共生の問題に迫る。

目次

中世イングランドの多文化共生

- 「グローバリズム」と「ローカリズム」- 山代 宏道
- チャーサーにおける語彙論的多元性
- 「心」に関する語彙に限定して- 大野 英志
- チャーサーと格言的表現 - 複眼的思考の一考察 - 地村 彰之
- 古高ドイツ語の宗教的語彙における多文化共生
- 古高ドイツ語へのゴート語・古アイルランド語・アングロ＝サクソン語の影響関係 - 四反田 想
- フランス中世文学にみる騎士像 - 多文化共生の視点から - 原野 昇
- 多文化共生の観点からみた西欧中世の宗教理解
- ノリッジのジュリアンの場合 - 水田 英実

あとがき

本書は、2002年12月8日に広島大学で開催された日本中世英語英文学会主催の公開シンポジウム「ヨーロッパ中世文化の多元性 - 特にイギリスとの関連において -」における発表原稿を土台として、それを多文化共生の視点から見直して書き改めたものである。当日、総合司会を務めた地村彰之は、本書のために原稿を書き下ろした。

また、広島大学中世ヨーロッパ研究会の著作としては、前二著『中世ヨーロッパに見る異文化接触』『中世ヨーロッパ文化における多元性』に次ぐ、第三弾である。今回は、上記シンポジウムにも参加した、倉敷芸術科学大学講師大野英志が新たに加わった。

「まえがき」にも書いたとおり、三著をとおして、著者たちの一貫した問題意識を盛り込んでいるつもりである。おおかたのご叱正をたまわれれば幸甚である。

まえがき

今日では、時間を表すにも距離を測るにも、世界中で一つの物差しが用いられていると言ってよいであろう。その物差しとはグリニッジ世界標準時であり、メートル法である。われわれはそのことに慣れきっており、それは今日の世界において非常に便利であるばかりか、必要不可欠なシステムであることは否定できない。

しかしこれらの制度が世界的に始まったのは比較的最近のことである。グリニッジ世界標準時の制定は1935年のことであり、メートル法の制定は1876年である。言い換えれば、それらは時空間把握の今日における一つの枠組み、一つのパラダイムにすぎない。

われわれは、今日われわれが置かれている世界を「現代」という一つの枠組みととらえ、その枠組みを相対化することを試みている。その際の手がかりをつかむきっかけとして、中世ヨーロッパ社会を対象としている。

今回は、中世ヨーロッパにおける時空間把握の問題を、旅と巡礼を中心とする「移動」の観点からみることにした。

山代は「中世ヨーロッパの旅－騎士と巡礼－」と題し、人びとはなぜ旅をしたのか、魂の救済を求める巡礼か、冒険と夢を求める騎士か、あるいは学徒としてかを考察する。

原野は「旅と巡礼の表象－中世フランス文学にみる－」と題し、中世ヨーロッパの人びとによって旅と巡礼がどのようにイメージされ、どのような文学ジャンルにおいてどのように表現されているかをみる。

四反田は「中世ドイツ文学にみる旅－騎士宮廷叙事詩と〈冒険〉－」と題し、物語の中で語られる「旅」や「冒険」に人びとが心を躍らされた、その虚構の構造に隠された背景と問題を考察する。

中尾は『『カンタベリー物語』にみる旅－構造と意味－』と題し、そこでの旅は身体の移動という場所的なものから、人間の一生という時間の移動、さらには人間の認識の深化という心理の移動へと重なり合って展開することを検証し、『カンタベリー物語』の新しい一つの読み方を提示する。

地村は「チョーサーとマンデヴィル－中世の旅と楽しみ－」と題し、中世後期 14 世紀に活躍したチョーサーとその当時の旅行記を著したマンデヴィルについて調べ、中世の旅と楽しみについてみていく。

水田は「中世の〈旅する人〉－天のエルサレムと地のエルサレム－」と題し、中世人は「この世では異国人であり、旅人にすぎない」というありかたをどう理解していたのかを探る。

目次

中世ヨーロッパの旅－騎士と巡礼－	山代 宏道
旅と巡礼の表象－中世フランス文学にみる－	原野 昇
中世ドイツ文学にみる旅－騎士宮廷叙事詩と〈冒険〉－	四反田 想
『カンタベリー物語』にみる旅－構造と意味－	中尾 佳行
チョーサーとマンデヴィルの旅－中世の旅と楽しみ－	地村 彰之
中世の〈旅する人〉－天のエルサレムと地のエルサレム－	水田 英実

あとがき

本書は、2003 年 9 月 20 日～10 月 18 日に広島市まちづくり市民交流プラザで 5 回にわたり開催された、平成 15 年度広島大学公開講座（広島県高等教育機関協議会、広島市教育委員会、財団法人広島市ひと・まちネットワークまちづくり市民交流プラザ主催「シティカレッジ」と連携）「旅と巡礼－中世ヨーロッパの時空間移動－」、および 2003 年 11 月 7 日に広島大学文学部で開催された同名のシンポジウムで発表された原稿が土台となっている。それぞれ本書のために加筆・修正がほどこしてある。前者はカモン・ケーブルテレビで、2004 年 2 月 14 日から 5 回にわたって放映された。地村は上記期間イギリスで研修中であったので、上記のいずれにも参加していないが、本書のために原稿を書き下ろした。

本書はまた、広島大学中世ヨーロッパ研究会がこれまでに出版してきた『中世ヨーロッパに見る異文化接触』（2000 年）、『中世ヨーロッパ文化における多元性』（2002 年）、『中世ヨーロッパと多文化共生』（2003 年）に続く第 4 集である。前三著と合わせてご参照いただければ幸甚である。

『中世ヨーロッパにおける排除と寛容』(2005年9月、溪水社刊)

まえがき

これまで、広島大学ヨーロッパ中世研究会では、中世ヨーロッパに関するいろいろのテーマで、シンポジウムを開催し、また論集を出版してきている。それらは『中世ヨーロッパに見る異文化接触』『中世ヨーロッパ文化における多元性』『中世ヨーロッパと多文化共生』『中世ヨーロッパの時空間移動』というものであった。いずれも、今日われわれが住んでいる社会を出発点とし、現代の価値観を相対化するために、比較の対象としての地域と時代をヨーロッパ中世に絞って、考察を進めてきたものである。

今回は『中世ヨーロッパにおける排除と寛容』というテーマを設定した。グローバル化が進む現代世界は異文化接触を加速させ、それとともに多文化共生を必須のものとしている。ある社会において、一つの集団がある価値観を基にその集団のまとまりを強めようとすれば、その価値基準に合わないものを排除しようとする。その際、排除される側がまとまって抵抗すれば、そこには対立や争いが生じる。争いは双方にとってマイナスが大きく、多大な犠牲をとまなう。したがって共存の道が探られ、寛容が要請されることになる。本書では、このような排除と寛容の問題を、キリスト教信仰、教会改革運動、フランス・ドイツ・イギリス中世文学において検討している。

水田は、中世キリスト教神学の視点から宗教上の排除と寛容の問題を検証している。山代は、11・12世紀教会改革運動で批判(排除)された聖職者たちが現実では受容(寛容)されていた場合があったことを明らかにしている。原野は、フランス中世文学作品の中で排除と寛容の問題がどのように扱われているかを検討することで、同時代人の排除と寛容に対する意識を探ろうとしている。四反田は、異教徒を「敵対者」と見なし「排除」しようとする十字軍文学と、対照的に異教徒に「寛容」的態度を示している騎士宮廷叙事詩の観点を紹介し、その差異の背景を究明している。中尾は、ヒロイン・クリセイデの「心変わり」がどのように裁かれ(排除)、どのように受容されていったか(寛容)を、チャーサー、ヘンリソン、そしてシェークスピアの作品例から比較考察している。最後に、地村は、写字生に対するチャーサーの不満、写本と諸刊本との共通点と

相違点，作品のテキスト伝達の観点から，テキストにおける排除と寛容の問題を検討している。

目次

中世キリスト教における排除と寛容	
- 対異教徒・対ユダヤ教徒・対異端者 -	水田 英実
中世イングランドにおける排除と寛容	
- 教会改革運動とノリッジ -	山代 宏道
フランス中世文学にみる排除と寛容	
- 『ボンチュー伯の息女』再読 -	原野 昇
中世ドイツ文学における排除と寛容	
- ヴァルターとヴォルフラムの場合 -	四反田 想
クリセイデ像の変容にみる排除と寛容	中尾 佳行
チョーサーの作品における写本とテキスト	
- テキストに対する排除と寛容 -	地村 彰之

国際研究集会「中世ヨーロッパにおける排除と寛容」

2005年3月26日-27日に広島大学学士会館第1会議室において、広島大学ヨーロッパ中世研究会主催の国際研究集会“Exclusion and Tolerance in Medieval Europe”が開催された。国際研究集会のテーマは文字通り「中世ヨーロッパにおける排除と寛容」であり、哲学、歴史学、語学、文学の諸分野からすべて英語による2つの講演と10の研究発表及び討論が、学際的視点から活発に行われた。当研究集会は、主として広島大学メンバーから構成される「広島大学ヨーロッパ中世研究会」が主体となって獲得した平成16年度科学研究費補助金「中世ヨーロッパ文化の多元性に関する総合的研究」(基盤研究(B)(2))に基づいて実現した。海外からオクスフォード大学テリー・ホード Terry Hoad 先生(英語学)とザルツブルク大学ジークリット・シュミット Siegrid Schmidt 先生(ドイツ中世文学)を招聘し、各人に基調講演と研究発表を御願い致した。第1日目に研究発表 Paper Session 1(司会:地村彰之,発表:水田英実,山代宏道,中尾佳行),研究発表2(司会:中尾,発表:四反田想,ベルンハルト・エーリンガー Bernhard Öhlinger,シュミット),招待講演 Lecture A(ホード)とレセプション,第2日目は研究発表3(司会:四反田,発表:原野,有泉泰男[日本大学],地村,ホード)と招待講演 B(シュミット)という日程であった。イギリス,オーストリアで活躍中の気鋭の研究者を迎えて,率直な意見交換が行われ,実り多い研究集会であった。

*Exclusion and Tolerance
in Medieval Europe*

23 March 2005 (Wednesday) - 24 March 2005 (Thursday)
Conference Room 1, Gakushi Kaikan, Hiroshima University

Abstract

**Religious Tolerance and Exclusion of Pagans, Judaists
and Heretics according to St. Thomas Aquinas**

Hidemi MIZUTA

The topic that I have chosen is a religious one. But the reason for my choice is definitely not that I am religious. It is because I have in mind that in today's Iraqi situation or Palestinian or other similar situations, there is an underlying conflict between religions and civilizations over values, although needless to say any facile simplification should be avoided. And yet, seriously religious tolerance is expected to be ensured. Having this kind of contemporary problem in mind, I'd like to shift the axis of time a little to the past and that of space to the West, in order to consider the problems of exclusion and tolerance in medieval Europe, especially of religious tolerance and intolerance, exclusion and symbiosis in the field of religious beliefs.

**Exclusion and Tolerance in Medieval England:
Church Reform Movement and Norwich**

Hiromichi YAMASHIRO

In this report, I would like to discuss the exclusion and tolerance in medieval

England, especially during the Anglo-Norman Period (1066-1154) after the Norman Conquest (1066) .

In the 11th and 12th century Western Christendom, the wave of Church Reform Movement reached from the Roman Papacy to each region. Here, I will call this Church Reform Movement as “globalization,” because it penetrated the common world view and the common value system. In one region, that is, England, how did the people of different social levels respond to the goals for Church Reform? We now regard the prohibitions of simony (i.e. purchase of holy offices and payment for ecclesiastical services) , clerical marriage, and lay investiture as “global standards.” Then, how did this ecclesiastical “globalization” influence the people at different levels in Medieval England?

First, I would like to discuss briefly the reactions of the top level of the society. What were the reactions of the kings, archbishops and bishops to the observance of the Church Reform goals? The goals were the prohibitions of simony, clerical marriage, and lay investiture. I will deal with the problems from the viewpoints of their rejections or acceptance.

Secondly, how were the situations at the parish level? I would like to discuss the problems of those clerics who violated such prohibition decrees. Then, were they excluded or tolerated by the people in their parishes? I would say that it is possible to discuss these problems in terms of the conflicts between “globalism” and “localism.”

In conclusion, I would like to say that such clerics were not entirely excluded but rather tolerated by the people at parish level. The situation was a reflection of the “localism,” that is, the local and traditional customs of the parish churches in the bishopric of Norwich.

Exclusion and Tolerance in Criseyde/Cresseid/Cressida

Yoshiyuki NAKAO

The Trojan legends continued to be told by various writers extended from the ancient, through the medieval, to the modern period. However, it was only by Benoit, a French poet in 12th century that the love of Troilus and Criseyde and her betrayal of him were highlighted as an episode in the story. Since then she has been stigmatized as an inconstant lover. This being the case, how to deal with 'her betrayal' became a focal point of the story, and varied from writer to writer. This paper is an attempt to reexamine changing images of Criseyde, a betrayer of Troilus, and make clear how much these writers excluded or tolerated her. We have focused on Criseyde by Chaucer, the late fourteenth century English poet, Cresseid by Henryson, the fifteenth century Scottish poet, who was in the transitional period from the medieval to the modern, and Cressida by Shakespeare, the Renaissance poet.

Exclusion and Tolerance in Walther and Wolfram: the Concepts of Pagans (paganism)

So SHITANDA

In my presentation, I would like to discuss how the so called 'pagans' were described and evaluated in the history of medieval German poetry, especially in the knight-courtly German Literature in the first half of the 13th Century. The knight court epic poetry which indicates 'tolerance'-attitude by contrast to be the crusade literature ('song of a crusade') which is going to consider that a pagan is an 'adversary' and is going to 'eliminate' the pagan: these two different viewpoints are introduced, and the history cultural background of the difference is explored. In this research presentation, the concept of 'exclusion' and 'tolerance' in Medieval German literature is surveyed. Next, the concept and example of 'Heide' ('pagan') in Medieval German literature are

verified as a concept relevant to these. „Das Palästinalied“ (“The Song of Palestine”) in the poetry of Walther von der Vogelweide is taken up as an example of the song of crusade literature and a crusade. Furthermore, epic poetry “Parzival” of Wolfram von Eschenbach is treated as an example of the knight court epic poetry made tolerant-like. I try to carry out comparison contrastive analysis of the both from a viewpoint of the concept of ‘tolerance’ and ‘exclusion’.

0. Introduction

1. Concept of ‘Exclusion’ and ‘Tolerance’ in Medieval German Literature
2. Concept and Example of ‘Heide’ (‘Pagan’) in Medieval German Literature
3. Example of ‘Exclusion’ and Tolerance in the Poetry of Walther von der Vogelweide
4. Example of ‘Exclusion’ and ‘Tolerance’ in "Parzival" of Wolfram von Eschenbach
5. Conclusion

Exclusion and Tolerance in La Fille du comte de Pontieu

Noboru HARANO

Manuscripts and Texts in Chaucer’s Works: An Approach to Exclusion and Tolerance for Texts

Akiyuki JIMURA

There exist the true, the good and the beautiful in the world. We seek to pursue our ideal life, following ethical value judgments based upon those virtues. They may not remain universal if they change through space and time. We wish to choose our own values, depending upon temporarily elusive ideas keeping up with the times. However, if those values exist beyond the spatial and temporal span, we will not exclude them, but

perceive in them something common, integrated and effective. Even though there are various contradictory things, some strong spiritual powers function as agents of integrity and become universal values.

One of the reasons why literary works in the past are valued even now is that they are accepted as having their own identities beyond spatial and temporal limitations. They belong to be a kind of literary tradition which tells us that they are not the historical records of excluded literary texts, but what kind of tolerance and acceptance of literary texts we have succeeded to.

The works of Geoffrey Chaucer are like this. Terry Jones (2003; 2004) indicated that Chaucer had been suddenly murdered in 1400. If it were a fact, we could have some doubt why he had to be excluded in society where he was not only a courtier but also a diplomat in the age of Richard II. Even though he disappeared unexpectedly, however, he remained as a father of English poetry, to say nothing of the English language. His works became a treasure of English literature. They were written about 600 years ago, but people often talk of his works as they were contemporaries in their own age. For example, Chaucer's description of spring in the beginning of "The General Prologue" to the *Canterbury Tales* has a great influence upon the minds of contemporary British people.

Chaucer's works have been transmitted to later generations by scribes' manuscripts. In earlier times, scribes could somewhat freely make or create Chaucer's works in their own way. When comparing several editions of Chaucer's works with one another, we can notice some marked features of difference rather than similarity. This fact of course makes us think of the existence of Chaucerian manuscripts as written by several scribes rather than as implied by the editors' principles of editing texts. When scribes transcribed the archetypes of the texts, they were able to use their own dialects. We should be careful not to identify their customs with copying of a sutra in Eastern cultures where people copy the texts as literally and accurately as possible. In this paper, first we discuss the relationship between Chaucer and Archbishop Arundel, based upon Jones's books. Second, we deal with some problems of manuscripts and scribes, with special reference to Chaucer's complaint to Adam the scribe. Third, we investigate some problems of

textual transmission of Chaucer's manuscripts from the viewpoints of exclusion and tolerance: (1) similarities and differences of several manuscripts and texts of The Parliament of Fowls and (2) textual transmission of The Canterbury Tales.

謝辞

上記のような過去5年間にわたる研究会活動において、いつも積極的なリーダーシップを発揮されてメンバーを啓発して来られた原野昇教授が、2006年3月末をもって退職されます。これまでの先生の学恩に感謝するとともに、これからの先生のご健勝をお祈りいたします。

2005年9月

水田 英実
山代 宏道
中尾 佳行
地村 彰之
四反田 想